

博士論文の要旨および 博士論文審査結果の要旨

氏名	谷山智彦
学位の種類	博士（比較文化学）
学位記番号	文博甲第10号
学位授与の日付	2011年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Thomas Hardy の小説における光と闇： 女性達の意識と身体
論文審査委員	主査 小野 良子 教授 副査 日下 隆平 教授 副査 藤森かよ子 教授

<博士論文の要旨>

Thomas Hardy の小説における光と闇： 女性達の意識と身体

谷山智彦

本論文では、Thomas Hardy の作品における光や闇の描写と、彼の悲劇的小説の中でその物語の中心的な役割を担う女性達の心理的動向とその関

係性に着目する。Hardy の作品では Wessex と呼ばれる田園地帯が作品の舞台となっており、数多くの豊かな自然や人々の暮らしの情景が精密かつ印象的な描写によって表現されている。こうした描写の中において、森林地や荒野を包む暗黒や、人々が灯す家の光や篝火といった描写が特に大きな存在感を持っている。それは読者に風景を強く印象付けるだけに留まらず、時に人物の内面的動向を暗示する比喩的な役割も担っているのである。特に、女性の周辺にこうした描写は顕著に現れ、彼女達の心理を克明に読者に伝えているのである。

空間を満たし、人々の周辺を彩る光と闇が暗示するものの多くは、主に女性達に対する周囲からの抑圧に関わる葛藤や苦悩である。作品の書かれた背景にあるヴィクトリア朝の社会において、女性は男性に従属し、彼らを支え、倫理的な側面から補佐する付属的存在として捉えられていた。そしてさらに、性的にも高潔で、＜非性的＞であることを求められ、内面的にも非常に抑圧された立場にあった。そうした抑圧下にあって、女性達の身体は他者の欲望や願望の投影の対象であり、また女性自身にとっても、抑圧、葛藤の対象でもあった。言い換えれば、女性達は周囲から高潔な淑女としての姿を要求されながら、自らの身体に付随する性的感覚や欲求との間で葛藤を強いられたのである。Thomas Hardy の小説ではこうした女性の苦悩が描かれており、光や闇の描写はこうした女性の内面を強く提示する機能を果たしているのである。その機能は作品ごとに少しずつ異なり、様々な形式の葛藤と苦悩を示す。本稿では、彼の作品の中から、*The Return of the Native*, *The Woodlanders*, *Tess of the d'Urbervilles*, *Jude the Obscure* の4作を取り上げ、それぞれ異なった視点から女性の抑圧とそれに付随して現れる女性の身体と関わる意識と葛藤を検討する。

まず、1章では、*The Return of the Native* の主人公の一人である Eustacia Vye を中心にして作品を考察する。Eustacia は既存の女性の枠に収まらず、

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

常に自由を求め、あらゆる障害を跳ね除けようとする女性として描かれる。彼女の情念は破壊的であり、それは男性中心的な価値観や女性観等を常に打破しようとし、究極的には、そういった価値観に縛られる彼女自身の身体存在の破壊にまで及ぶ。彼女の自由を希求する情念の根底には、強い破壊衝動が存在しているのである。この彼女の激しい内面は、作品の中で荒野の暗黒を打ち破る篝火などの光に集約され、象徴的に描かれる。また彼女を取り巻く暗黒は、彼女に対する抑圧、拘束を象徴し、光と闇の交錯は彼女の情念を視覚的に示すのである。このように、風景で反復されて現れる光と闇が彼女の精神の動向を暗示する重要な描写となっており、読者に刻銘に印象付けられるようになっているのである。

2章では *The Woodlanders* を取り上げ、Eustacia Vye とは対照的に既存の道徳や女性観を受容し、自身の欲求や情念を抑圧する女性像から作品における光と闇を分析する。ここで注目する対象は、Grace Melbury という女性である。彼女は中産階級的な道徳と教養を教育を通して身に付けた女性であり、周囲の社会的な要請や男性からの抑圧に強く曝される女性として描かれる。彼女の周辺にも光が頻繁に現れ、風景の空間を満たし、また彼女の身体を照射し、印象的な空間を形成する。ここでの光は彼女の身体を明確に周囲に対して可視化し、周囲の視線を彼女に意識させ、律するという機能を持つてくる。彼女はこの空間の中で自分の身体に向けられる視線の存在を意識し、着飾り、適切な振舞いを心がけようとするのである。言わば、彼女に向けられる社会的な圧力や男性の視線、欲望の存在を光は強く暗示するのである。それに対して空間の暗黒は、逆に圧力や要請が及ばない空間として機能する。彼女とは対照的な女性として登場する Marty South は他者と社会的な要請や圧力に反発し、この暗黒の中に身を隠す。言わば、闇の空間はこうした圧力に対する抵抗の意を示す表象として機能している。ここでは、空間の光と闇は人物に対する抑圧とその苦悩や、そ

れに対する葛藤や反発を視覚化する描写となっているのであり、情念の抑圧の悲哀がそれによって示される。

3章では *Tess of the d'Urbervilles* を考察対象とする。この作品では、社会的な抑圧に曝されながらも密やかに抵抗する女性の姿が描かれ、また同時に、ヴィクトリア朝の最大のタブーである女性の性と、それに関する葛藤が中心的なテーマとなっている。こうしたものを視野に入れ、作品の光と闇と Tess の内面との関係を検討する。作品では Tess の性的な感覚や意識の発展が描かれるが、それに関する彼女の高揚や既存の道徳との葛藤は、彼女の身体周辺に頻出して現れる光と闇の描写によって表現されるのである。光は彼女の性的な感覚、快楽の発生と発展を暗示し、彼女の男性との接触の際などに身体に秘めた歓喜の感覚を暗示する描写として機能する。そして一方で、彼女の身体を覆い隠すように出現する闇は、彼女の性的情念、快楽に対する抵抗感と拒絶、葛藤を暗示するものとして機能している。彼女は身体的な欲求、性的な情念に対して当時の道徳的な観点から激しく葛藤するが、この作品での光の闇の交錯は、彼女の秘めた欲求、情念と道徳の間での激しい葛藤を視覚的に示すものとなっている。抑圧の中で葛藤し、その中でいかに自身の願いを追求し、実現しようとするか、また抑圧にいかにかに静かに抵抗を試みるかという様子が視覚的な描写を通じて表されるのである。

4章では、Hardy の最後の小説作品となる *Jude the Obscure* を考察する。この作品では、既存の女性像に疑問を持ち、男性との新たな関係性を追及する〈新しい女性〉が登場する。それがヒロインである Sue Bridehead である。ここでは、これまでの作品の背景に当然の前提として描かれていた女性観に疑問が投げ掛けられ、〈新しい女性〉とそれに伴う問題がここでは描かれる。最終章ではこうした問題を念頭に入れ、作品の光と闇の描写と Sue の心理との関係を検討する。Sue は主人公 Jude と旧来の因習を踏

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

破し、新たな関係を求める。しかし、彼女もまた女性として持つ身体的、性的な欲求と急進的な志向、思想との狭間で葛藤することになる。Tessの場合と同様に、光は引き続き性的な情念を表し、闇は性に対する抵抗と拒絶の表象として主に機能する。ここでは、新たな時代を背景とした彼女が内包する、女性としての抗いがたい衝動と＜新しい女性＞の姿を追求する急進的思想との狭間での葛藤が描かれる。やはりこの作品においても、光と闇は女性の精神の葛藤を鮮明に示す表象となっているのである。

本論文では、自由を求める女性、社会的な抑圧を避けきれず、苦悩しながらもそれを甘受する女性、そして性を意識し、その在り方に苦悩する女性、そして新たな女性の社会的な立場と在り方を模索しながら、自身の性に関して葛藤する4人の女性たちを取り上げた。そして、彼女たちの身体に関わる苦悩を鮮明かつ象徴的に示す光と闇の描写に着目し、作家 Hardy がその中に含ませた意義を論じた。それぞれの作品において、光と闇は女性達の情念と社会的要請との対決、葛藤、そして悲劇的な運命と苦悩を視覚的に読者に訴えかけることに成功している。

<博士論文審査結果の要旨>

Thomas Hardy の小説における光と闇：
女性達の意識と身体

審査委員 主査 小野 良子

審査委員 副査 日下 隆平

審査委員 副査 藤森かよ子

Ⅰ. 審査報告 (小野良子)

谷山論文は、ヴィクトリア朝英国を代表する小説家、トマス・ハーディの長編小説4点を取り上げ、近代資本主義の発展期にあった英国の地方都市に暮らす女性達が、男性への従属と貞節を強制する伝統的父権制社会の中で抑圧からの解散を模索して葛藤し、結局は敗北する姿が、作品中の〈光と闇〉の風景の中に描かれる情景を論じる。論文は、序論、本論4章、結論で構成され、156ページにわたる力作になっている（なお、注と文献目録を入れると180ページになる）。以下、谷山論文の論点を各章ごとに紹介し、その後、副査の審査を含めた総合評価を提示したい。

1. 論点

第1章： 中期の作品、*The Return of the Native* (1878年)を分析。小説の舞台、Egdon Heathの暗黒の荒野の女主人公 Eustacia Vyeの類似性について論じる。Hardyの多くの作品で、〈自然〉は強大な存在感を示すが、ロマン派の詩人達に影響を受けた豊かな情景描写は、作品世界にロマン主義

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

的要素を多く取り入れている。しかしながら、Hardy がロマン派の詩人と異なるのは、〈自然〉を人間に精神的成熟をもたらす啓示的空間としては描いていない点である。Egdon Heath の荒野は女主人公にとって、彼女の願望を阻害し、精神的苦痛をもたらす地獄のような空間である。女主人公は既存の女性観の規範から逸脱し、男女の性差による精神的拘束からの自己解放を志向する。彼女の反逆性はプロメテウス (Prometheus) のイメージを重ね合わされ、その風貌は異教的神秘性を備え、彼女の眼の中に宿る光はプロメテウスの炎を連想させる。荒野の闇に輝く炎の描写が、女主人公の反逆精神の表象として作品に繰り返し現われ、彼女が最終的には社会的拘束からの解散を断念した時、Egdon Heath の荒野は月も星も雲に覆われた、暗黒の閉鎖的空間となって彼女を閉じ込める。

第2章： 後年の秀作、*The Woodlanders* (1887年) を分析。本作品では、当時の英国社会が直面していた問題——地方の田園地帯への近代的、資本的価値観の流入で生じる文化の衝突——とそれによる女性の抑圧と葛藤を描いている。作者 Hardy は当時、地域社会と伝統、共同体の中での人間関係の変化に注目していた。作品で特に注目すべき点は、人間関係が描かれる〈光と闇〉の空間が、印象派絵画の手法に影響を受けていることである。1870年代にフランスで始まった印象派の技法は、人間の体感する光の瞬間的印象を色彩によって表現したが、Hardy はこの技法が人間の主観と感覚を視覚的に表現する効果的手法と考えた。作品の中で、女性に向けられる男性の視線と欲望は、印象派絵画を連想させる空間の明暗で表現され、〈光〉は女性に投影される男性の欲望と、それに呼応する女性の意識を描いた。

〈光〉の空間の中での視線の交錯には男女の支配構造が露呈するが、ここには Michael Foucault が論じた、「可視性と規律の内面化の権力構造」を読み取ることができる。Foucault は18世紀に Bentham が提案した「一

望監視構造を持つ監獄の構造」——罪人が光の差し込む独房に収監され、監視塔から常に可視化され、管理される——を援用して、権力の支配構造を分析した。Hardy の女性登場人物が監視者である男性の視線を常に意識させられ、彼らの望む規範に適合せざるを得ない状況は、Foucault 的権力構造に他ならない。

また、John Stuart Mill はヴィクトリア朝社会を分析して、「あらゆる階級の人々が周囲の視線と、検閲、監視によって支配され、抑圧されていた」と論じたが、Hardy の時代認識はまさに Mill が見た社会構造そのものである。作品の女性主人公 Grace は〈光〉のイメージで男性主人公の視線に「理想の女性」として捉えられるが、これは社会の規範である父権的価値体系の中で創造された、現実の女性の実態からかけ離れた、男性の妄想にすぎない。男性の欲望の視線の中で女性の生き方が決定され、拘束される男女の関係は Hardy の小説の中で繰り返し描かれる、ヴィクトリア朝的社会的構図である。女性登場人物の視線もまた、相手の男性を〈光〉のイメージで捉えるが、この場合、〈光〉は「男性の社会的、知的優位性の象徴」になる。

第3章： 代表作、*Tess of the d'Urbervilles* (1891年) を取り上げ、時代が規定する女性像の拘束に対して抵抗しながら、結局、自己の解放のために死を選ぶ女性主人公の意識の変遷を検討する。Tess の身体、意識、他者との関係は、月光や太陽の光、ランプの灯り、夜の闇を媒体にして描かれるが、当時、タブーとされていた女性の性的覚醒も重要なテーマとして追求されている。

地元の名士である D'Urbervilles 家の家事手伝いに雇われた Tess が、新しい生活環境に対して高揚感を抱く様子は陽光あふれる情景の中で描かれるが、作品では終始、太陽の光は男性支配の象徴として Tess を拘束する。そして、月光も男性の性的欲望の視線と同化して、女性達の性的願望を喚

起する。Tess は月光の下で雇主の Alec から性的暴行を受けるが、その時彼女は意識を失い、それと呼応するように月光が陰り、Tess は闇の中に意識と身体を隠すことになる。彼女の無意識の〈闇〉と自然の〈闇〉は男性の肉体的支配から逃れるための精神的隠れ家になる。〈光〉は Tess に男性の性的対象としての女性性を覚醒させ、〈闇〉は男性の性的支配に屈した肉体から意識が逃れるための空間となり、彼女の「抵抗と自衛の意思の表象」となる。Tess と関わるもう一人の男性 Angel は、性的に放縦な Alec とは対照的に、思索的な教養人だが、彼の視線もやはり、男性優位社会の通念を女性に押し付ける、抑圧的視線に他ならない。Tess を霊的、神秘的〈光〉のイメージで捉え、理想的女性として崇拜に似た感情を抱く Angel の愛も、Tess を〈理想〉の枠に拘束する社会的抑圧にすぎない。Tess は Alec を殺害して逃亡するが、自らも死を覚悟する。Alec に暴行を受けた時、精神までも支配されることに反抗して、無意識の〈闇〉に沈んだ Tess は、最後に、男性支配の社会から永久に逃れる空間として、死の〈闇〉を選択する。Tess の葛藤と死は、女性に性的、精神的抑圧を加える社会体制の中で、女性の官能と感性、自立の精神が弾圧され、抹殺されるヴィクトリア朝の現実を露呈する。

第4章： Hardy 最後の小説、*Jude, the Obscure* (1895年) は前作の *Tess* で取り上げた、女性の性的情念と葛藤を変化する社会状況のなかで描いた作品である。19世紀末の当時は、中産階級社会の女性観——家庭を守る、貞淑な従順な女性——が社会構造の変化に伴い、揺らぎ始めた時代だった。人口比に不均衡が生じ、男性人口が女性を下回り、結婚の機会を得られない女性の比率が高まって、女性の非婚が社会問題化し始める。このため、結婚以外に生活する場を女性に与えるため、高等教育や就労の機会の拡張を求める動きが活発化してくる。そして、結婚が人生の唯一の選択であるという旧来の見解に異議を唱える急進的な女性達も出現し始めた。1890年

代には小説の中でも、従来の結婚観を否定し、女性の自立を主張する〈新しい女性〉が取り上げられることが多くなり、Hardy もその例外ではなかった。Jude の女性主人公、Sue は結婚を「女性を圧迫する悪しき制度」として拒絶し、〈性〉の規制を外れた自由な男女関係を求める〈新しい女性〉である。前作の Tess は最後まで、当時の慣習的女性観に呪縛され、それが彼女の悲劇の原因として描かれた。しかし、教養があり、独立心旺盛な Sue は Tess が甘受した男性優位社会の女性像を疑問視し、結婚制度を否定する。

Jude の主人公は男性だが、Hardy は男性主人公の視点から女性との関係を語ることで、社会的拘束の中で女性が経験する精神的葛藤をより複雑に描いた。労働者階級出身の Jude は社会的成功を約束する新しい共同体への参入を切望し、大学をめざす。彼が階級社会の上段を目指して進学を夢見る Christminster の大学は、Jude の眼には〈光の街〉として理想化される。〈光の街〉は彼に〈知性を授ける女性〉のイメージで捉えられるが、希望をもたらす〈光〉は視覚的に鮮明さを欠く、〈薄明かり〉である。Jude は読書に没頭し、日常生活に関心を失うが、彼が唯一興味を持ち続けるのが、日没直後の淡い月明かりである。Jude, the Obscure の表題は、つまり、主人公の社会的地位の低さを示すのみならず、〈薄明かり〉の空間志向を暗示している。

しかしながら、主人公の〈薄明かり〉の志向は情熱的な女性 Arabella との出会いで激変する。性的魅力にあふれ、積極的な Arabella の姿は太陽の光の中で捉えられ、強烈で鮮明な〈光〉のイメージを Jude に焼き付ける。彼女との出会いで Jude は大学進学の夢を忘れ、性的欲望に取り付かれる。二人は結婚するが、結局、破綻し、Jude は再び、大学を目指す。このときに出会った女性が、〈淡い光〉のイメージを持つ女性、Sue である。Jude は社会的成功の〈光〉である Christminster の〈薄明かり〉と Sue の

〈淡い光〉のイメージを結びつけ、意識の奥で〈理想の光〉として一体化させる。

Sue は師範学校で教育を受け、伝統的な女性観の枠組みに納まる事を嫌う、急進的な女性である。自由と自立を求め、彼女を閉じ込める「女性観の枠組み」から脱出を試みるが、その時に彼女が飛び込むのは〈暗闇〉である。〈暗闇〉はヴィクトリア朝の父権的視線から彼女の女性性を隠し、性的支配から逃れるための空間だった。Sue は Jude に魅かれるが、しかし、結婚制度を男性の性的支配だと考える彼女は、男性との対等な関係の構築にとって障害となる結婚を拒絶する。ところが、Sue は Jude の子供を生んだことで、自身が抵抗し続けた伝統的な女性観の枠組みに否応なく組み込まれてしまう。「子供を持つこと」が彼女の人生の選択肢を社会的、経済的に限定し、独立性を脅かし、Sue を男性に依存せざるを得ない、社会的弱者の立場におしもどす。Sue の精神的敗北と身体の衰弱は「弱い朝の光」の光景の中で描かれ、彼女が社会の抑圧に屈した姿が強調される。

結論： Hardy の描く世界は、作品の舞台 Egdon Heath に代表されるような、人間の営為と文明に無関心に存在し、時には圧倒的な不条理が支配する、〈神なき荒野〉である。Hardy はキリスト教の信仰に対して疑念を抱き、人間の思考と意思によってのみ社会を改善し、発展できると考えていた。Hardy の小説の女性登場人物たちは自由を渴望し、既存の秩序に抵抗するが、結局は社会の慣習の圧倒的な力に屈し、自己を破滅させていく。作品で描かれる〈光と闇〉の情景は、女性達の葛藤と闘い、敗北を一枚の絵画のように鮮明に印象づける Hardy 的空間である。

2. 評価

作品を丹念に読み込み、作品世界と登場人物の具体的描写が暗示する象徴的意味を検討する谷山氏の論述スタイルは、伝統的な文学批評の方法で

ある。現代批評の華やかさはないが、文学研究の基本に立った、堅実な論文である。現在までのハーディ研究の成果（国内外）を踏まえて、ハーディ作品に頻出する〈光と闇〉の光景描写に注目し、特に女性登場人物の精神的葛藤の観点から〈光と闇〉の象徴的意味を追求する谷山氏の論文からは、着実でしかも意欲的な研究態度が伺える。ハーディは豊潤な詩的イメージを喚起させる文体で人物と情景を緻密に描き、非英語圏の読者にとっては決して容易に読み進めていける作家ではない。難解だが、しかし、ターナーや印象派の絵画のように美しいハーディ作品の本質を明快に論述していくには、相当の技量が要求されるだろう。谷山論文は肩に力が入り、時には論述の流れが悪く、的確な批評の言葉を模索してつまずく場合もあるのだが、真摯に作品に対峙して、ハーディの作品世界の特質に迫ろうとする意欲は十分に評価できる。

II. 審査報告（日下隆平）

谷山論文は、*The Return of the Natives* (1878), *The Woodlanders* (1887), *Tess of the D'Urbervilles* (1891), *Jude, the Obscure* (1895) など、Hardy 中期に書かれた4作の小説を論じたものである。それぞれ、Egdon Heath という荒野、前近代的な森林地、因習的な村、クライストミンスターなどが、それぞれの作品の舞台となる。時代を1840年～50年頃に設定している。ビクトリア朝的社会規範のなかで生き方を強いられるなかで、自らの生き方を模索する主人公の生き方の追求が、従来からよく見られるアプローチであった。近年はJ. B. Bullen, Avrom Fleishmann などのように、絵画的イメージ、さらには色彩と心理との関わりから、作品のもつ象徴性と主人公たちの心の動きに注目しているものもある。谷山論文は、これらの近年の研究成果を踏まえた上で、Hardy 小説にみる光と闇という視覚的コントラストを通して、それらが女性たちの意識と身体に働きかけることを論じて

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

いく。もとより、Hardy はじぶんの作品を「絵画」として読んでもらうことを願っていたと言われる。谷山がエッセイから論じているように、同時代の画家、Turner を初めとして、フランドルの画家たちから受けた影響は多大なものがあつた。論文中、これらのアプローチがもっとも明確、かつ有効であつたのは、*The Return of the Native* に関する作品論である。ハーディの描写はたんに荒涼たる自然を表現しているのではなく、その風景は登場人物の内面的表象となっている。つまり、この作品において、人物の特徴的色彩とエグドン・ヒースの暗闇とが織りなす世界は人物の内面を表現するのに役立っている。本論はこの点に着目し、クリム、ユーステシア、ベンなどの人物を分析し、ここから作者の人間観を考察したものである。この物語のテーマは簡単に言えば、非情な運命の支配する荒野エグドン・ヒースに憑かれた者の心と、そこに反逆して逃れ出ようとする者の心の葛藤である。この荒野は読むものに詩的想像力を刺激してやまない。そこは「タルタロス」のように、暗黒の色彩が支配して人々に原初的な恐怖を与える。

谷山論文が対象作品を丹念に読み、近年のハーディ研究などを用いて、登場人物の心情からでなく、風景描写から内面性を論じたこと、その色彩が感情に及ぼす影響に着目し、想像力が引き起こす悲劇性を導き出した点も興味深い論点である。エグドンヒースのアポカリプス的世界は現代的な要素にも通じる。社会の因習に立ち向かう女性像という論点だけならば、ビクトリア朝社会を論じるだけの退屈極まる論文に終始したと思われる。

III. 審査報告（藤森かよ子）

1. 谷山氏が設定したテーマ、目標がよく実現されている。トマス・ハーディが、自らの代表作である4編の小説において、ヒロインたちの意識と身体性を描くために、またヒロインたちに深く関わる人々のありよう

を描くために、いかに意図的に、光と闇のイメージを多用しているか、光と闇の対比を利用しているか、(レンブラントや印象派の画家たちの作品から示唆を受けた) 絵画的手法に挑んでいるかについて、その例証に成功している。

2. 本論は、非常に精密なテキストの読解による光と闇の描写の例を豊かに示していくことで構成されているが、通常ならば、それだけであるのならば読み手にとっては退屈に感じられる。しかし、谷山氏の論文は、その作業を通して、19世紀末期の英国社会の変化、それに翻弄される人間たちの姿を浮かび上がらせることに成功している。なぜかといえば、本論は、精密なテキストの読解の理想的サンプルだからである。優れた作品解説になっているからである。
3. 部分的には難解な点もあるが、記述はおおむね明快である。谷山氏が難解な原文を丹念に読み込むことに快楽を感じていること、谷山氏が持つ作品への愛情が、よく読み手に伝わる。

IV. 総 評 (小野, 日下, 藤森)

何点かの課題もあるが、対象作品を熟読し、先行するハーディ研究を踏まえたうえで、独自の作品論を展開しようとした論文である。谷山智彦氏は研究者として基礎的能力を備えており、申請論文は桃山学院大学の文学研究科博士学位論文の水準に達していると判断できる。